

## 特集：2005年度日本数学会出版賞受賞者のことば

志賀浩二氏

### 思い出すこと

私が数学の啓蒙書を書きはじめたきっかけは、朝倉書店の森田豊さんが、東京工大の私の研究室にたまたま立ち寄られたことでした。それは1987年のことでした。その話の中から『微分積分30講』が生まれました。私は数学の内容を誰にもわかりやすく開示するためには、まずそれに相応した‘形’が必要と思い、30講という形式を考えました。しかし書き上げたあとには、もうこんな苦しい仕事は二度としたくないと思いました。それは、1講を原稿10～12校程度で納めるという作業は、思いのほか困難で、はみ出した部分を次講にどのように送るかが大変でした。それから少し書き進むと、前に書いた‘講’枠組みが動かせないものだということがはっきりと感じられてきました。ちょうど建物を土台から築いていくようなもので、前のところに手を加えると全体が崩れるのです。さらに20講を書き終えた頃から、1講を書き上げるたびに、残りの講の数が重くのしかかってきました。30講として完結できるか。29講となっても、31講となっても困るのです。ごく自然な形で終わらなくてはなりません。

書き上げて2週間ほどは、これでよかったのかという思いと、解放感にひたっていました。しかしこの形式にかけた想いは強く残りました。30講という形式が私の中に刻み込まれてしまったのです。

私はちょうどこのあと、東工大を去って私大へ移り、研究に専心する思いも、学生を指導する義務も軽くなってきました。私は、何かに誘われるように30講シリーズを書き続け、結局10冊を書きました。はじめは12冊を書こうかと思っていたのですが、9冊目の「ルベグ積分」と10冊目の「固有値問題」を書き終えたとき、30講という形式はこれで完結した形をとったと思いました。

数学の啓蒙書は、数学の教科書ではないので、その形式が問われるようです。音楽にいろいろな演奏形式があるように、数学という学問を取り出すにもいろいろな形式があり、それぞれの形式は、読者に異なる調べとなって伝わり、読者の共感を誘うようです。読者は数学をたのしむのです。そのことは、本質的な意味で、数学が文化であることを物語っているように思います。

志賀浩二